

豊明希望チャペル礼拝

2022/1/2

I ペテロ 4 : 12~19

「迫害に備えて」

この手紙が書かれて、紀元 313 年、ローマ皇帝コンスタンティヌス 1 世はミラノの勅令を發布してキリスト教を公認されるまで、教会は、200 年近くにわたって迫害を受けます。後任の 10 年後、紀元 325 年に、(教会)公会議が、この I ペテロが書かれた宛先の人たち小アジア(トルコ)のニケア(ニカイア)で開かれました。



いわゆるニケア公会議です。左記の絵は、第 2 回会議の様子を画いたものですが、その会議には、318 人の代表者が集まってまいりました。当時の報告書を見ると、彼らのうちから、目の見えない人と、手を失ったか、あるいは、足を失った人を除くと、健全者は、12 人以下しかいなかったと書かれています。その障害者というのは、すべてローマの迫害による拷問によって傷ついた人々であったということです (Vance Havner)。この第 1 回ニケア公会議は、キリストこそ神。我らの主である。勝利者であると、宣言する会議でありました。

今日の箇所は、その迫害の問題に真正面から触れる内容になっています。最初の聖句を読みます。

「4:12 愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間で燃えさかる試練を、何か思いがけないことが起こったかのように、不審に思っははいけません。むしろ、キリストの苦難にあずかれればあずかるほど、いっそう喜びなさい。キリストの栄光が現れるときにも、歓喜にあふれて喜ぶためです。」

「燃えさかる火の試練」とあります。記録によれば、キリスト者への迫害はあらゆる残酷な事が考えられてなされました。クリスチャンを棒の先にくくりつけて油をかけ火をつけて競技場を照らすたいまつ代わりにしたと言います。この言葉は、象徴的な言い方ではなく、すでに、始まった迫害の様子を書いているのかも知れません。

ところで、20 世紀は、世界中で、クリスチャンだからという理由で、殺されたり土地を追われたりした人の数は、200 万人を超えると計算しました。そしてその数字には、共産圏やイスラム圏、アジアやヨーロッパで起きた迫害が含まれておりません。2022 年を迎え、迫害がないとは言えないのです。なぜなら、真理が説かれるところには、必ず迫害が起きる、それは、聖書が示すところだからです。



三浦綾子の小説「母」の映画が数年前に公開されました。この映画は、政府の思想弾圧によって命を落とした、小説家、小林多喜二の母親を扱った映画です。彼女は多喜二をなくした後、クリスチャンになった。その時代、どのように教会がかかわり、牧師達、クリスチャンたちが関わったかを、小説では描いています。ちなみに、元旦のはが

きで、知り合いの兄弟（私が結婚式の司式をした兄弟）が、この映画の、現代プロダクションのスタッフで、「なんと、ヤクザ役で出演します！」とありましたので、楽しみに見たのですが、つい 70 数年前に、ここ日本でこういう迫害的なことがあったのだと、あらためて実感したのです。

本日の箇所の内容ですが、ペテロが、ローマから迫害の火がついた、その迫害にトルコのクリスチャンたちも、いずれ苦しむことになるだろう、その心の準備をさせるためにここが書かれています。そして、ここで焦点があてられている問題は、「信仰を持っている人が(迫害のような)苦しむことがあるのか？」という問題でした。

C S ルイスというイギリスの作家でクリスチャンがいますが、彼にある人がこのように質問しました。「なぜ、正しい人が苦しむのでしょうか。」と。C S ルイスは答えました。「なぜ、正しい人が苦しまないということがありうるだろうか。」と。

ルイスに言わせれば、この罪の世で正しく歩もうとして苦しまない方がおかしいのであって、正しく歩むからこそ苦しむのは当たり前だと言ったのです。ルイスは、むしろ、クリスチャンは、苦しむ人の一番ちかくにいて、キリストがそうであったように、共に苦しむのだ、苦しむべき使命が与えられているのだと言っているのです。

ちなみに、クリスチャンの受ける苦しみを、3つに分類したいと思います。

- 1, 罪や自分の弱さの結果として受ける痛み＝当然の痛み
- 2, 成長のための痛み
- 3, 正しく歩んで言えるがゆえに受ける痛み＝迫害

ペテロは、まず 1 の痛みに言及します。

(1) 「4:15 あなたがたのうちのだれも、人殺し、盗人、危害を加える者、他人のことに干渉する者として、痛みにあうことがないようにしなさい。」

ペテロは、罪の結果苦しむのは論外であって、それは避けるべき痛みだと言います。

(2)次に、「成長のための痛み」です。自分自身の成長のために痛みが与えられるという事もあるのです。

ヘブル 12 : 10 「(神は、) 私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、懲らしめるのです。」というような痛みであります。「こらしめ」とありますから、ヨブのように特段の罪がないのに苦しむ例もあるでしょうけれど、弱さや罪をきっかけとして、神さまが、その人に「成長」のきっかけを与えて下さると言う事もあると思います。

ある人が、面白いことを言いました。なぜ、神は、時々、クリスチャンをして、燃えさかる火の試練を通すのか。と。それは、金を精錬するのと同じだ。金の細工人は、不純物を含んだ金を燃えるばかりに熱して、どろどろに溶け始めて不純物が浮き出ているいは燃えてしまい、あるいは取り除くようにする。神も金細工人のようにクリスチャンをそのように試すのだと。

ヘレン・ケラー (1880-1968 米。) は、目が見えず耳が聞こえず、話せないとい



う3重のハンデを負ったクリスチャンでした(左記の写真:「ヘレン・ケラーと家庭教師のアン・サリバン」)。これ以上ない苦しみをクリスチャンとして負いました(正しくは、その苦しみを通してキリストと出会いました)。その彼女が言うのです。「私は楽しいときより苦しんでいるときにこそ成長しました」と。私は、何よりそれは、

信仰から出る言葉だと感じています。

成長のための苦しみと言っても、あまりに、過酷ですが、私たちは、彼女の歩みを通して、そうした苦しみがかえって神の恵みであることも知る事がゆるされているのだと思います。

そして、今日の中心的なテーマ、迫害としての苦しみです。

「4:17 さばきが神の家から始まる時が来ているからです。それが、まず私たちから始まるとすれば、神の福音に従わない者たちの結末はどうなるのでしょうか。4:18 「正しい者がかろうじて救われるのなら、不敬虔な者や罪人はどうなるのか。」4:19 ですから、神のみこころにより苦しみにあっている人たちは、善を行いつつ、真実な創造者に自分のたましいをゆだねなさい。」

ペテロは、迫害に向かう心構えについて述べるのです。

それは、神を信頼して、正面からその、苦しみから逃げないで向かい合い、むしろ、クリスチャンは、その苦しみの最前線で、後ろに続く人々のために、防波堤のごとく、火の粉を払うが如く、勇敢に戦って欲しいと。

「さばきが、まず私たちから始まる」それは、迫害の最前線にクリスチャンが私たちが立つという覚悟を言っています。

そして、これこそ、クリスチャンが迫害という理不尽なことを通して苦しむ意味だと言うのです。どのように考えたら良いのでしょうか。

例えば戦争が始まる時、考え方の変わった少数者、特に神様が一番偉い神様にだけ従うなどという人たちは一番最初に迫害を受けるのです。そして、次に自分で逃げ回れず、体の弱いような弱者が犠牲となると言われるのです。このようにして、クリスチャンは、悪い時代の最前線で、最初の犠牲者になってきたのです。

今日の一つのテーマは、なぜ、クリスチャンは迫害を受けるのかと言うこと、なぜ正しい者が苦しみを受けるのかと言うことでした。そして、最初に小林多喜二の話に触れました。



小林多喜二は、その思想ゆえに警察に引いていかれ、クリスチャンとしてではなかったのですが、その思想ゆえに、警察の激しい取り調べを受け、一時、家に帰ったのですが、その後、その傷が元で死にました。左記の写真は、その時の写真です。多喜二の遺体と、その母と、弟が、多喜二の遺体を囲んでいます。

この母は、その後、クリスチャンになるのですが、この、警察から一時帰宅したときの、母が、牧師によって導かれるときのことを取材して、母が言ったことを、こう書いています。

三浦綾子は、それは取材に基づくものだろうと思いますが、こう書いています。

「わだしはね、多喜二が警察から戻って来た日の姿が、本当に何とも言えん思いで思い出された。・・神さまは、自分のたった一人の子供でさえ、十字架にかけられた。神さまだって、どんなに辛かったべな。だけど、人間を救は、こうした道しか神さまにはなかったのね。・・・十字架の上で言われた言葉が腹にこたえた。わだしだって、多喜二だって、「どうかこの人たちをおゆるし下さい」なんてとっても言えん。「神さま、白黒つけてくれ」ってばっかり思ってた。近藤先先生は、「神さまは、正しい方だから、この世の最後の裁判の時には、白黒つけて下さる。お母さん、安心していいんですよ」って、わだしの手を取ってくれた。そんな時わだしは、なんかわからんが、神さまってかたが、わかったよう気がしたの。」

三浦綾子は、なぜ、息子が死ななければならぬか。しかし、神さまは、その一人子、罪が無いのに、差し出された。なんと不条理なことか。

しかし、そのように、私たちの不条理な苦しみのずっと先に、その苦しみの最前線で、その不条理を受け止め、苦しんで下さった方がいる、そう考えただけで、私の疑問は解けたように思うと、そんな意味のことを、この「母」に言わせているのかもしれないと、私は読みました。

ペテロは、この17節で、私たちは苦しみの最前線にいますと言います。そして、むしろ、クリスチャンでない人々に感心を寄せているように見えます。私たちクリスチャンは、魂の救いをいただいて、天国への希望があるキリスト者ですが、心配なのはむしろ救われていない人たちですと、言っているように聞こえるのです。

たしかに、苦しみの何故という事への答えはないように見えますが、その苦しみと闘う意味があると言っているように聞こえるのです。

そして、だからこそと、最後に、こう言うのです。

4:19「ですから、神のみこころにより苦しみにあっている人たちは、善を行いつつ、真実な創造者に自分のたましいをゆだねなさい。」

苦しみの最前線で、クリスチャンは、それと戦い、あたかも、これから訪れる悪い時代の防波堤として、おおしく善を行うべきで、あとは、神様にまかせなさいと。

おそらく、ペテロは、自分のことを思い出していると思うのですね。イエス様が十字架についていく様子を横目で見ながら、深く後悔した自分のことをです。そして、思ったと思います。こんな情けない、弱いクリスチャンである私を最後まで、励まし通して下さったイエス様。こんどこそ、その苦しみにあずかりたい。意味のある苦しみにあずかりたいと。小アジアのみなさんも、来るべき迫害、また襲い来る苦しみや悲しみを、正々堂々と喜んで、待ってましたとばかり受け止めて下さい。あとに続く、救われるべき人々、教会の最前線で、勇敢に戦って下さいと。

たしかに、クリスチャンであろうとなかろうと、苦しみや悲しみは確実にやってきます。しかし、真実の神にお任せれば戦えると、言っているのだと思います。

2022年の歩み、そして今週の歩み、また、これからの時代が、どんな時代となろうと、神に、ゆだねることの出来る歩みを、歩ませていただきたいと心から願います。